

仙台・文化財サポーター会活動記録（保存継承部会）

○梁川で蠣崎波響をめぐる旅

日時 2026年7月17日（金）

参加者 9名

9時5分に仙台駅出発。槻木駅で阿武隈急行に乗り換えます。

急行の車窓からは、どこまでも続く青々とした田んぼやその中で遊ぶサギの姿。そして阿武隈川を眺めながらおしゃべりを楽しんでいるうちに10時22分「やながわ希望の森公園前駅」に到着。



日本で6番目に長い駅名だそうです。

○蠣崎波響について
(1764～1826)



(19 世紀前半頃の波響肖像画)

・蠣崎波響（かきざきはきょう）は松前藩第 8 代藩主・松前資広の五男として出生後、家老職を務める蠣崎家の養子となりました。幼少より画技に優れ、8 歳の頃に城内で疾走する騎馬を描いて周囲を驚かせたという逸話が残っています。

・その後、江戸で建部凌岱と宋紫石の二人に画を学びます。特に宋紫石からは「南蘋風」と呼ばれる対象を忠実に写生し濃厚な着彩を施した作風を学びます。建部凌岱の下では「東岱」、宋紫石の下では「杏雨」「京雨」という号を用いていました。

●寛政元（1789）年に起こったクナシリ・メナシの戦いと言われるアイヌの反乱の際、その鎮圧と説得に協力をしたアイヌの指導者たちの肖像画を描いた「夷酋列像」（いしゅうれつぞう）はのちに光格天皇の勲覧を受け、波響の名を世に知らしめることになります。



【イコトイの肖像画】

・この「夷酋列像」を携えて上洛した折、円山応挙やその門人らの円山四条派に影響を受け、また多くの文人たちとの交流により、画風も次第に穏やかなものへと変化していきます。

●一方、松前藩の家老としては、異母兄である九代藩主・道広と、道広の隠居後は甥でもある十代藩主・章広に仕えました。

藩が梁川移封から複領までの間、家老として一切を取り仕切るとともに、つとに有名になっていた作画の才能を生かし、画を売りまくることにより苦しい藩の財政を大いに補いました。

・文政5（1822）年、松前藩が悲願の複領を果たしたのちに波響は藩政から退き詩画の世界へ没入します。しかし、それから間もなくの文政9（1826）年、63歳で松前にて没しました。

①梁川天神社



ここは波響が早朝起床後に身を清め、小箋に絵（書）を描いて参拝・奉納し祈願した社。

○波響が寄進した灯籠

波響は心願成就のために天神様の神々に手を合わせ、毎日お参りをかさねていました。御神徳のはたらきにより長年の望みが見事に実を結び、神恩感謝に奉納された大変縁起の良い石灯籠です。



②梁川美術館

開催中の企画展「蠣崎波響と門人たち」の作品を鑑賞しました。
撮影が許された2点について紹介します。

○波響作「蓬萊図」

款記には「文化丑壺春波響試毫」とあります。「試毫（しこう）」とは書初めのこと。新年に描かれました。仙人が住む不老不死の山と言われる伝説の山、吉祥画の題材として好まれました。ここでは描かれているは霊亀という蓬蓬山を背負う巨大な伝説上の生き物。また、松の上には小さく描かれた二羽の鶴がいます。



○波響門下「熊坂適山」の作品

「摘山画」の落款から、若年の頃に描いたものとみられます。
長春花（バラ）、菊、水仙、寿石、白頭鳥が描かれた吉祥画。



③ 蠣崎波響邸跡



江戸時代後期 1807 から 1821 年までの 14 年間を過ごした屋敷跡。
自宅を「梅瘦柳眠邨舎」（ばいそうりゃうみんそんしゃ）と称し、藩の仕事のかたわら、絵や漢詩の制作をおこなっていました。
波響は、ここで梁川の自然や風景を描いた「梁川八景図」・「四季花鳥図巻」など、多くのすぐれた作品を残しています。



（池上さん撮影）

（おわりに）

波響没後 200 年の記念の年、梁川での波響の活躍を振り返るとともに、門人の作品を紹介する展示会が 9 月 23 日まで開催されています。



私は梁川の地に松前藩が移封されていたことも、蠣崎波響についても、まったく知りませんでした。が、佐藤会長からの事前レクを受け、そして梁川を訪れ、その作品の数々を見て、その偉業を知ることができましたことは大きな喜びです。

企画・案内をしていただいた佐藤会長にあらためて感謝申し上げます。

「梁川城跡」を巡り、雨に降られることなく 14 時 30 分に福島で解散。とても楽しい大人の遠足でした。

以上 本多正明（記）

（参考）

・ 梁川美術館資料

・各所掲示板

